

研究ノート

高地性遺跡について

村川 行弘

1. はじめに
2. 会下山遺跡の立地
3. 発掘調査の成果
4. 集落の機能
5. おわりに

キーワード：弥生の軍事集落

1. はじめに

大阪湾沿岸における弥生時代の集落遺跡の大半は、農耕生産に都合のよい条件を持つ低地性遺跡であり、高地性遺跡は農耕社会においては例外的な特異な遺跡という性格をもっている。

農耕生産を基盤とする社会において、生産及び農耕に直接的に関係のない異常遺跡が弥生中期後半（B.C. 1世紀の頃）に出現するのはどのような理由によるのであろうか。その機能や性格の分析によって、高地性集落を必要とした地域社会の社会的・政治的背景の考察が可能となるのではなかろうか。

高地性遺跡については、避災的要因、焼畑的要因、見張り所的要因、軍事的防衛的要因など、立地条件からみた種々の機能や性格が論議されている。すべて低地性遺跡との対比のうえで、高地性集落の生産様式の鮮明化、集落内の機能

と様相の把握、経営年代の究明などによって、その特性を理解する必要がある。この点で、完全発掘調査を行った兵庫県芦屋市の会下山（えげのやま）遺跡の検討は参考になろう。

2. 会下山遺跡の立地

会下山は六甲山系の南面して突出する一支脈で、最高所は標高199.2米を測り、海岸線（芦屋浜）からは約2軒北方に位置している。山頂からは眼下に芦屋市街が一望でき、南方は大阪湾を経て紀伊半島を遠望し、東方は武庫、西摂の平野を経て生駒山、さらに遠く奈良、京都の山々が望見でき、西方は神戸市域から淡路島・六甲連山を、北方は林立する表六甲の高峰を望接するすぐれた眺望をもつ位置にある。この会下山の南北と東西にのびる山頂尾根部に集落跡が検出された。

3. 発掘調査の成果

発掘調査によって得られた会下山遺跡の遺構は、住居跡8（同時期・すべて三度以上建替え）、焼土壌4（野外共同炊事場）、物置跡3、倉庫跡1、土壌墓6、柵跡1、廃棄場1（J地区）、泉跡1（J地区）で、集落を構成する要素をすべてみたしていた。

出土の土器はⅢ型式（中期中葉）13%、Ⅳ型式（中期後葉）12%、Ⅴ型式（後期前葉）75%で、後期の土器が圧倒的に多いが、中期の土器も4分の1の量である。

器種別では、壺35%、甕26%、鉢10%、高坏26%、器台1%、その他（水差・蓋・手焙りなど）2%である。祭祀容器27%、日常容器71%という比率も得られた。

型式別では、Ⅲ型式は壺72%、甕16%、高坏10%、鉢2%であり、Ⅳ型式は壺17%、甕27%、鉢28%、高坏21%、器台7%、Ⅴ型式は壺32%、甕28%、鉢8%、高坏31%、器台0.7%、その他0.3%と変化が著しい。日常容器は中期67%、後期60%、祭祀容器は中期19%、後期32%となる。

遺構別にみると、中期土器はN地区46%、U地区36%、焼土壙36%、J地区29%、L地区28%、X地区25%、C地区28%、E地区8%、F地区14%、Q地区22%、S地区15%となり、東西支尾根の遺構に中期の土器が多い。

器種別でみると、壺はN住居跡50%、X住居跡48%が高く、Q祭祀場跡4%が最も低く、他は30~45%の範囲に入る。甕はE住居跡37%からS祭祀場跡12%の幅を持っている。鉢はQ祭祀場とF住居跡がともに19%で、他は5~10%の枠内である。しかし、焼土壙跡は0%である。

高坏はS祭祀場跡46%、Q祭祀場跡39%、F住居跡19%、E住居跡18%、X住居跡19%、N住居跡17%、J住居跡地区30%、L住居跡25%などとなるが、S・Q地区に集中する。高坏はⅢ型式10%、Ⅳ型式21%、Ⅴ型式31%と増大するが、これはS・Q地区の含有量による。生駒山西麓系の土器も数十点出土している。

石器は打製石鏃23、石錐5、刃器13（不定形）、磨製石鏃1、片刃石斧1（柱状）、磨製石剣3、砥石22、石錐3、石製投弾8、丸石2、叩石3、

軽石6、河原石35、燧石34、異形石製品3（男女の性器など）、石英加工品1、サヌカイト剥片199（石器の原材、香川県金山産と大阪府二上山産）などであるが、農耕用の石包丁はない。

石鏃を長さとの比で整理してみると、低地性遺跡出土の石鏃に比し、1:4の長大な形状のものが高地性遺跡の特性として出てくる。石製投弾はS・X・J・L・M地区で出土している。いずれも戦闘用の武器である。

鉄器は中央支尾根の全地区と東方支尾根のX・L・J住居跡から石器、青銅器と同伴して出土している。釣針、鉄斧（鑄鉄、朝鮮半島製）、鉄ノミ、ヤリガンナ、鉄釘、鉄金具など小型工具類が多いのが特色である。他に鉄鏃8があり、また逆刺大型鉄鏃があり、鏃身逆刺部は2重の逆刺部を構成している。

青銅器は3点出土している。1は有茎銅鏃（日本製）で、現存長2.1㍓・厚さ0.25㍓でF住居跡出土である。2は漢式三翼鏃（中国製）で、日本では初見のものである。会下山山腹の土砂崩れによって発見されたもので、山崩れは会下山斜面の流出物堆積層であるので、当遺跡伴出遺物と考えられる。現存長4.4㍓、最大幅1.18㍓で、長さ3.7㍓・1辺1㍓の断面正三角形を呈する鏃身に、径0.3㍓・長さ0.65㍓の断面円形に近い茎部を付加した形式で、身部には三角形の各頂点から三方にするどい狭翼がとりつけられている。近時、さらに1点が採取されている。

他にガラス小玉14が出土している。コバルトブルー6、スカイブルー8である。

Q地区からは球形土製品も出土している。

4. 集落の機能

集落の機能についてみると、F住居跡は会下

山遺跡では貴重視される遺物を最も豊富に出土している。磨製石鏃、鉄斧、ヤリガンナ、銅鏃、鉄鏃、鉄ノミなど鉄製品をはじめ、武器、生産用具でも特殊なものを集中的に保有している。他にも特性をあげれば、住居跡群のなかでは最高所に位置し、床面積が最大（56平方米）であり、唯一の室内炉をもち、他の住居跡とはP柵列を介して隔絶し、S・Q祭祀場遺構に接していることなどである。

このようにみてくると、F住居跡が共同体の管理、運営を掌握した統括者住居で、集団構造的にはF家長と有力世帯員、それに統率された一般構成員から成る非農耕生産的な世帯共同体によって展開をみた高地性集落であるといえる。

また、集落内の各地区別、遺構別に遺物を整理しても、各地区の機能を証明し、会下山集落民の集団関係を裏付けることになる。

そして、会下山遺跡に関する限り、西方に対する軍事的、政治的色彩が濃厚であり、弥生中期中葉の時期にJ地区に先ず生活施設がつくられ、やがて東西支尾根、中央支尾根に展開し、その機能の終末は弥生後期前葉である。軍事的、政治的緊張の存在した時期を、この幅の中で考えてよかろう。青銅製三翼鏃や鉄製大形鏃など外国製品の出土などにも注目したい。

5. おわりに

現状での著名な高地性遺跡の分布を眺めると、瀬戸内海沿岸に集中している。周防灘に南面する山口県下の40余ヶ所、広島湾に南面する40余ヶ所、岡山県下の児島半島から備讃諸島にわたって30余ヶ所、香川県では三崎半島の紫雲山遺跡を代表に、北面する瀬戸内海一帯と塩飽諸島、小豆島にかけて20余ヶ所、大阪湾沿岸では兵庫県・大阪府域に70余ヶ所、紀伊水道に面する和

歌山県下で60余ヶ所が知られている。

弥生中期後半に出現し、後期に終末を告げる遺跡が多いのも特色である。

一般的には低湿地域、丘陵台地部に排水用の大環濠をめぐらし、大形祭殿や大形建造物をともなう拠点的大規模集落が営まれ、水稻農耕の展開が拡散する時期である。

しかし、低地性遺跡においても、IV型式（紀元前後）で終りを告げる遺跡が大阪湾沿岸地域に顕著にみられる。

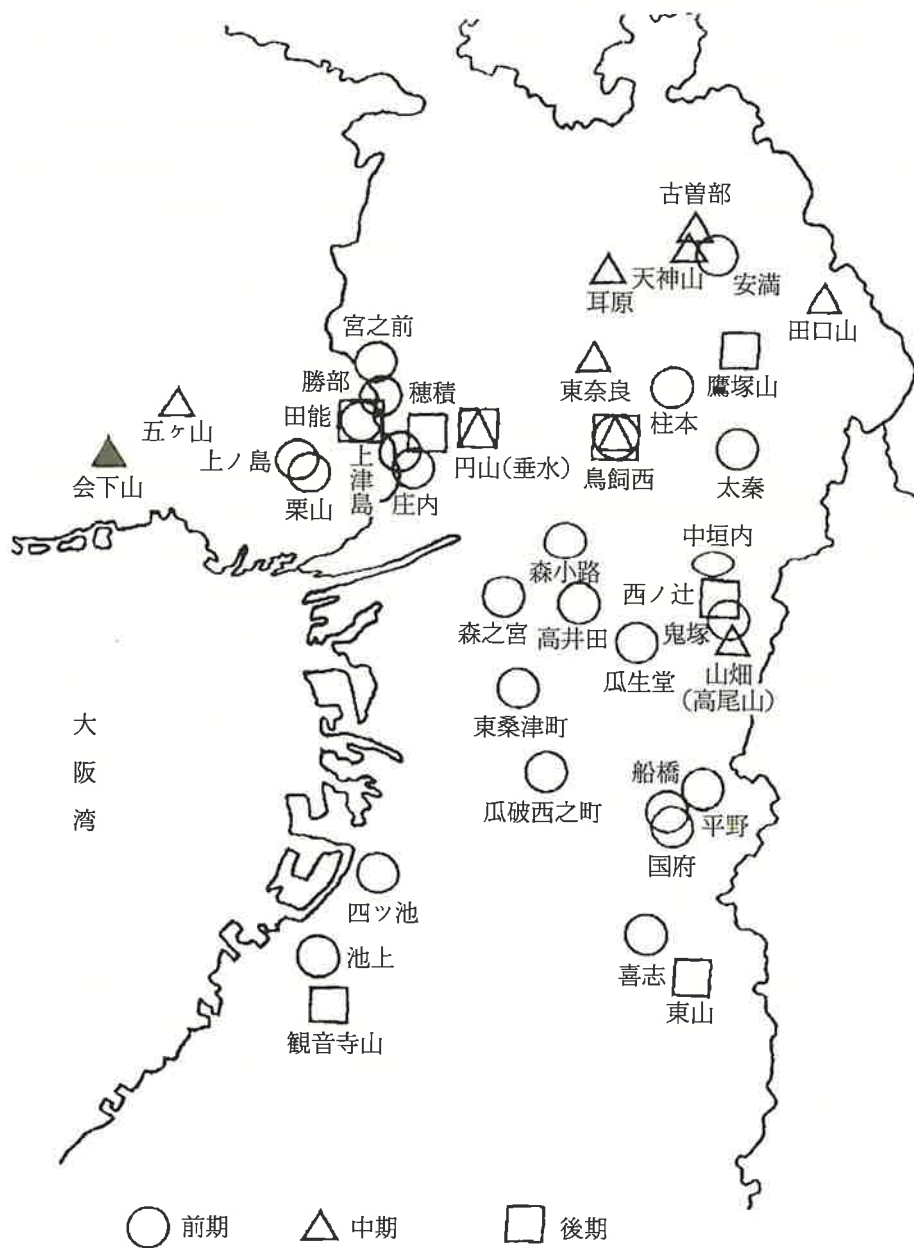
このような時期に、農耕地に遠く、生産的でない山頂尾根部に見張り所、のろし台的役割を含めた高地性集落が出現するのである。

それも水上の道の幹線である瀬戸内海沿岸に集中して遺跡が発見されている。

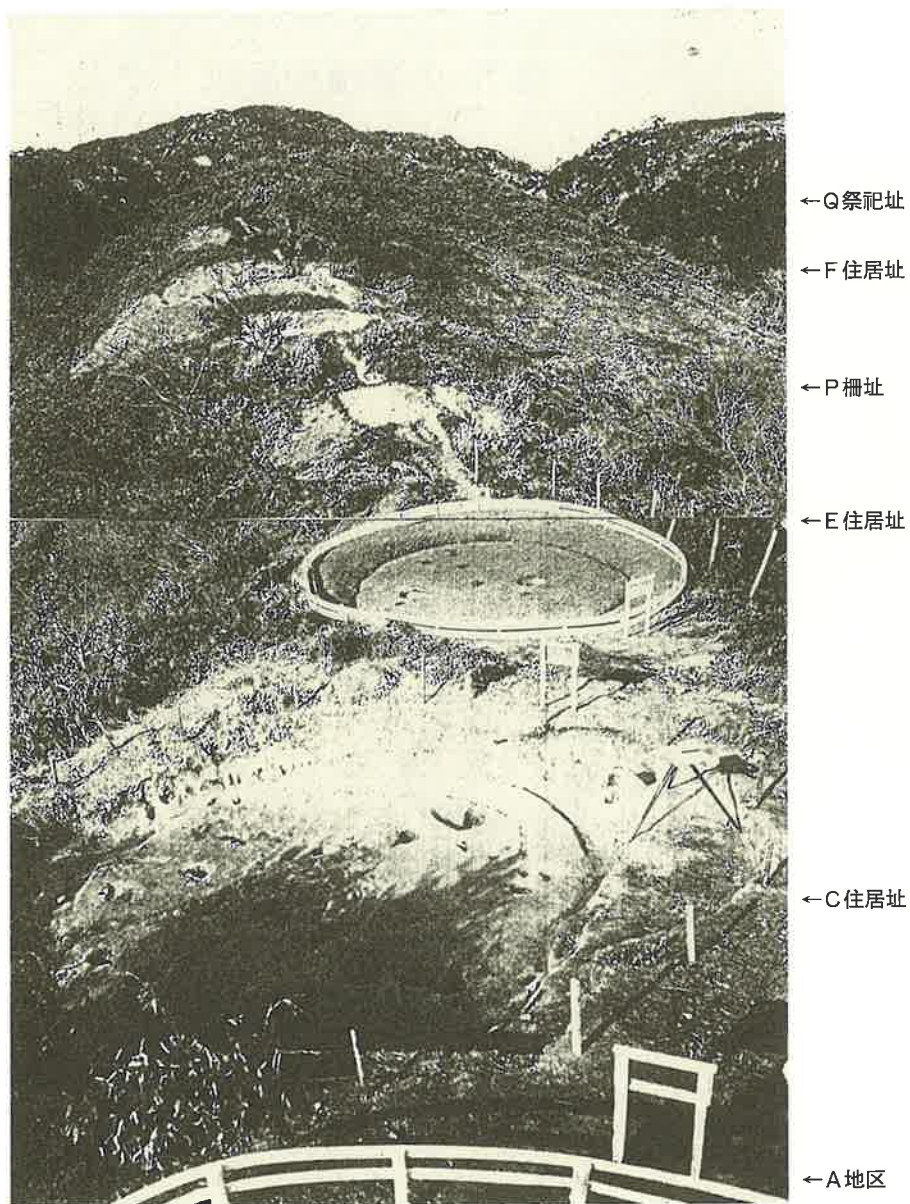
この時期（B.C. 1世紀～A.D. 1世紀の頃）に瀬戸内海の海上支配権とも関連した政治的、社会的、軍事的緊張が存在したことを物語っている。東アジアにおける国際的、国内的緊張とは何であったかという命題が生じてくる。

『魏志倭人伝』の倭国大乱は2世紀後半の時期であるが、それ以前にも「倭国大乱」が存在したことも考えられる。

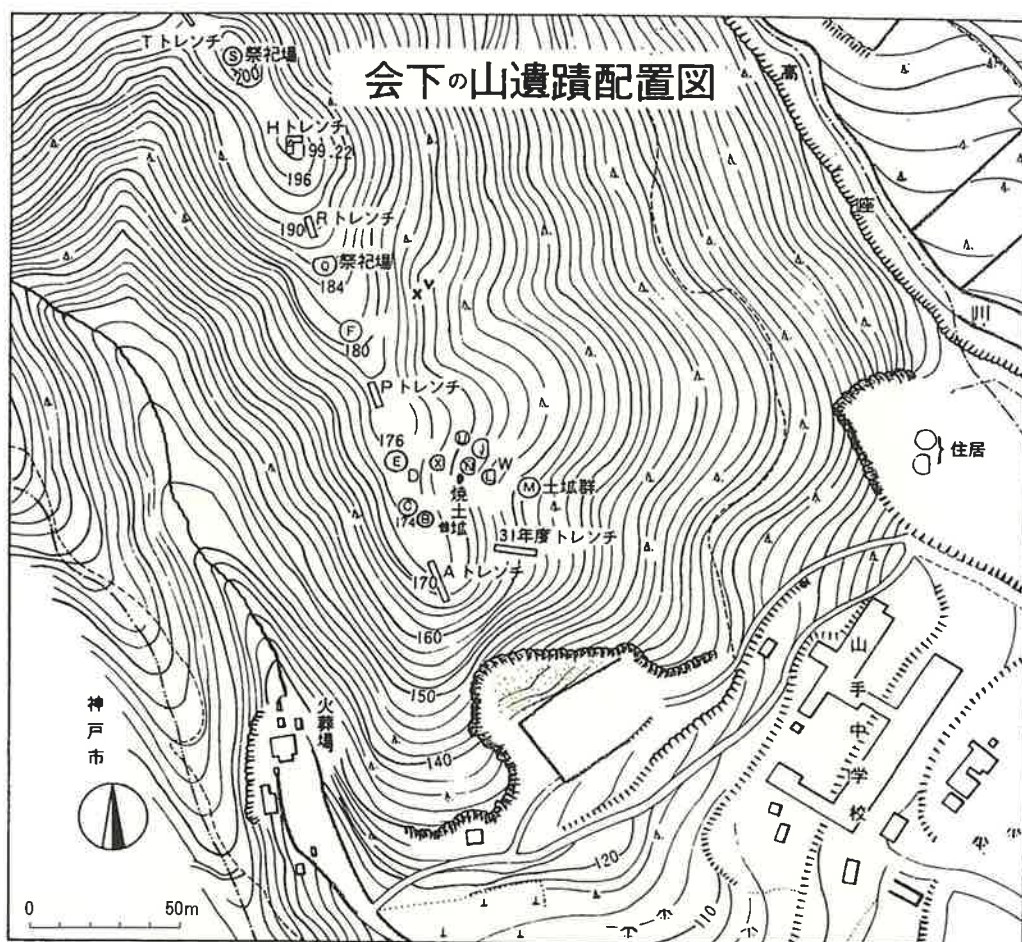
会下山遺跡の全域を完全発掘したため、弥生時代の山頂式高地性遺跡の分析可能な唯一の発掘成果として紹介した次第である。



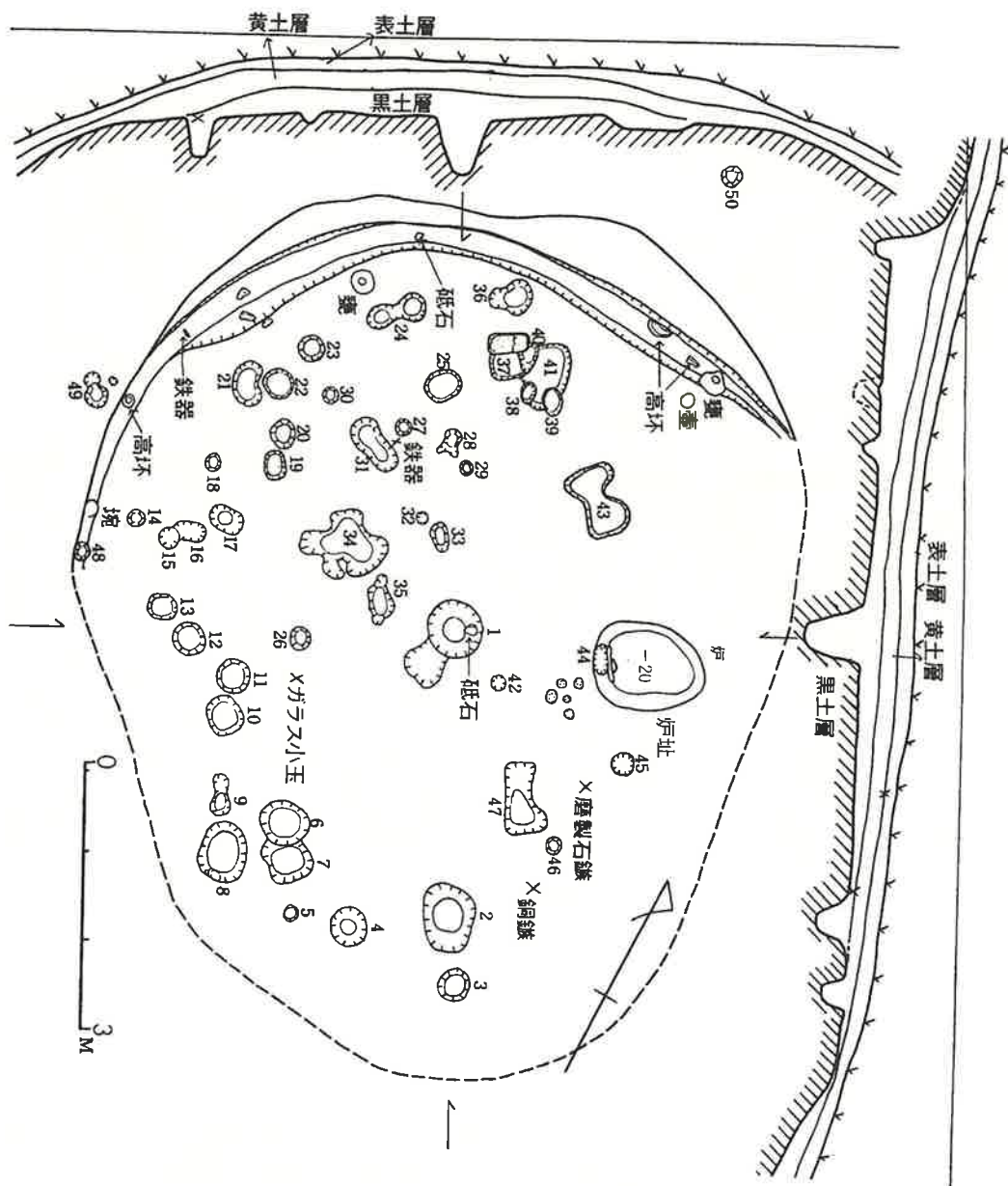
本学周辺の弥生遺跡



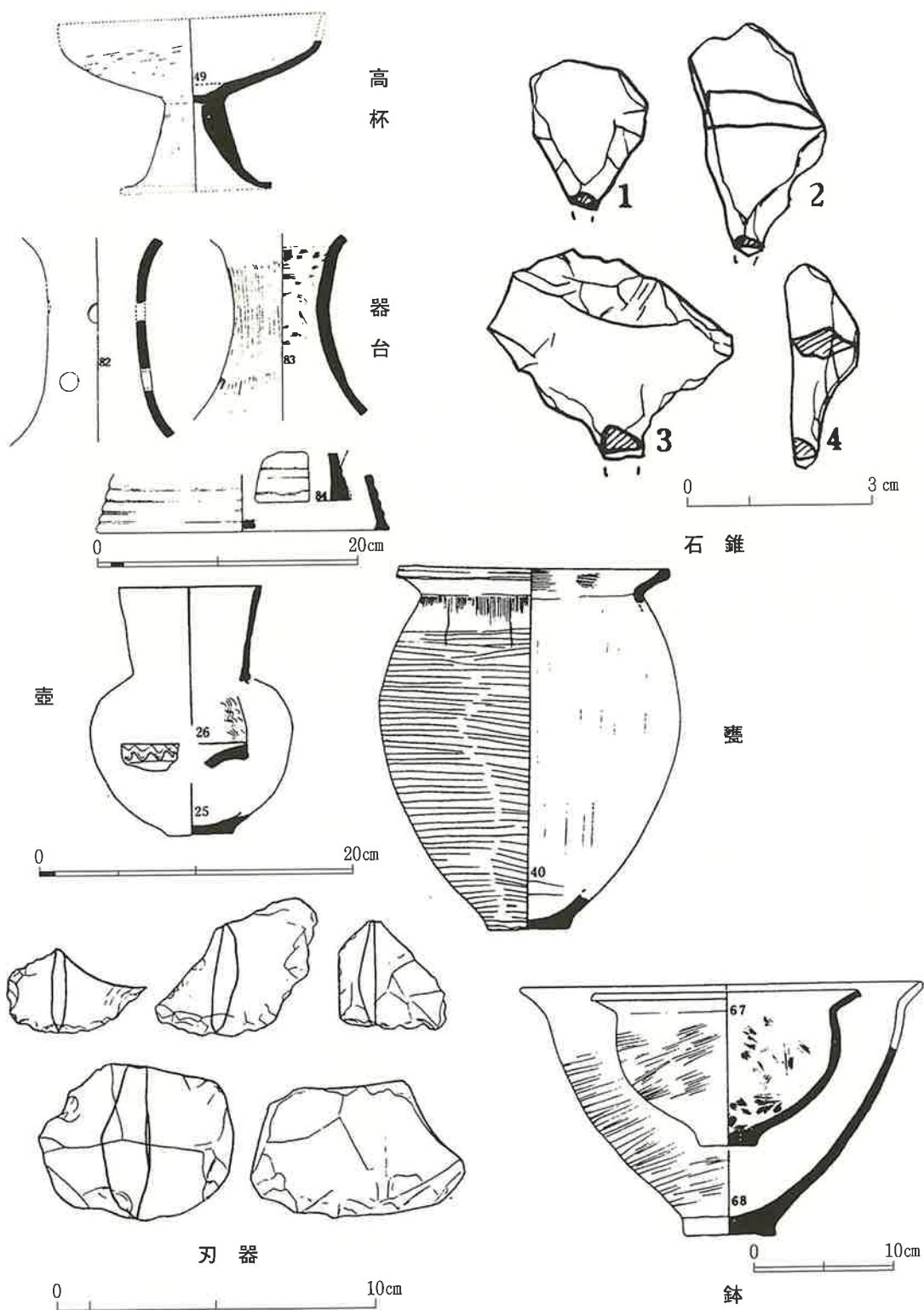
南北中央尾根の遺構

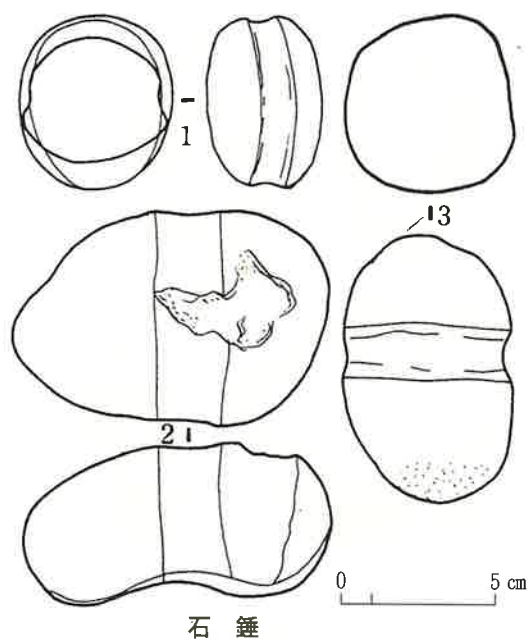


会下山の遺構位置図

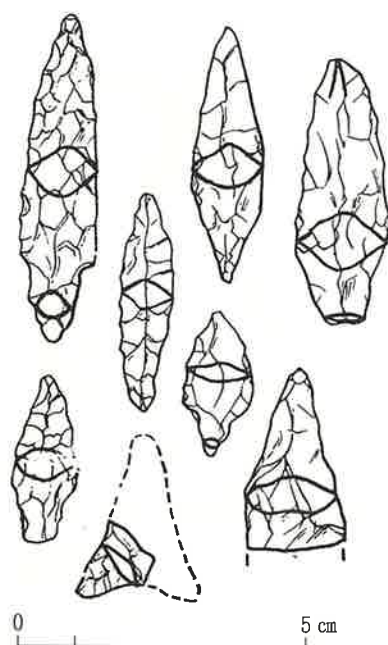


F 首長住居跡

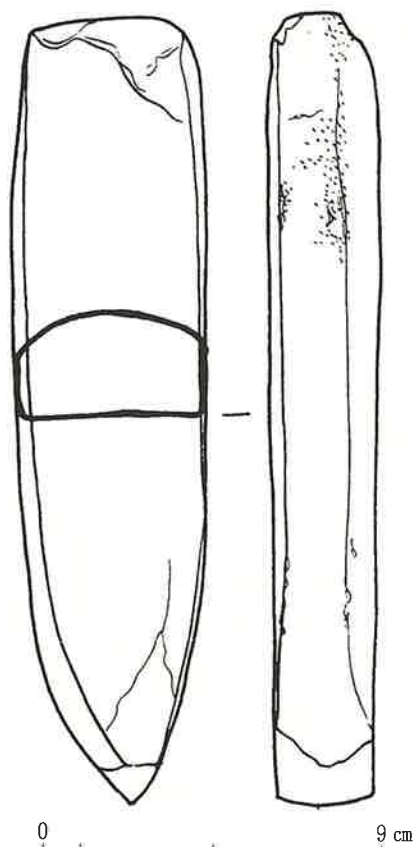




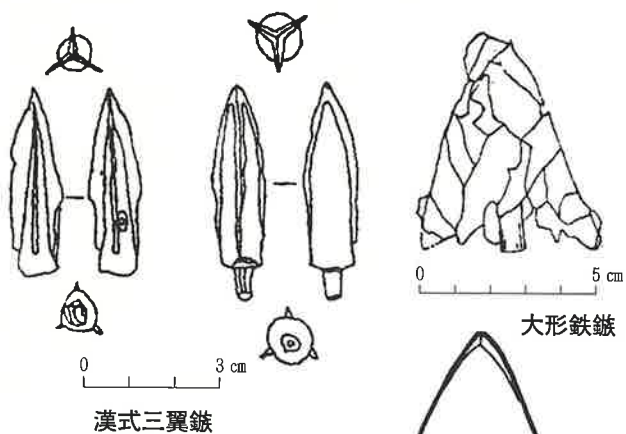
石錘



打製石鏃



片刃石斧



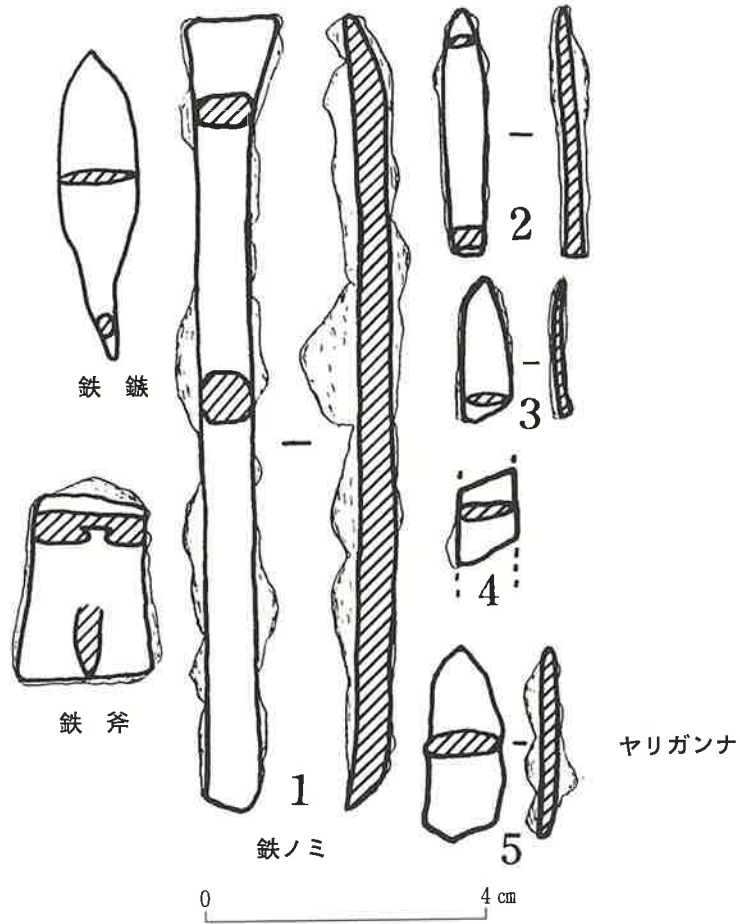
漢式三翼鏃



銅鏃



磨製石鏃



鉄器類

